

## カトリック山手教会月報

## やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地  
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第658号 2024年12月8日

## 「聖年」という時の位置付け

主任司祭 ミカエル鈴木 真

『やまて』11月号にも記載されましたが、来年2025年は「通常聖年」とされています。この「聖年」を理解する上で、キーワードとなるのは聖書にある「安息」という概念・言葉だと思われまます。「安息」と訳された言葉は、訳語どおりに「休む・元気を回復する」という意味もありますが、もともとは〈もとの状態に戻す〉という意味だそうです。レビ記25章には、7年に一度の「安息年」の規定がありますが、これも本来は「土地を神さまが造られた元の状態に戻す」ために農業を休む、ということです。そして、7年を7回数えたその翌年、50年に一度の大安息(別名「ヨベルの年」)も、奴隷制や土地の売り買い、または金銭の貸し借りなどは人間社会が生み出した歪み・ひずみであるとして、せめて50年に一度はそれらすべてを「チャラ」にする、という意味があります。古代イスラエルでこの制度がどれだけ遵守されていたかは、疑問視する聖書学者もいますが、要は「神さまが造られた元の姿に戻す」ということでしょう。『歴代誌(下)』の36章には、ちょっと背筋が寒くなる記述もあります。バビロニアによって南ユダ王国が滅ぼされ、多くのイスラエルの民がバビロンへと捕囚として連れ去られてイスラエルの地が荒廃したことを述べた後に「こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した。」と書くのです。つまり、所詮、人間のやることはすべ

て、神さまが造られたこの世を歪ませてしまうもの…ということなのでしょう。「聖年」とは、そのような「安息」という精神が置かれた「ヨベルの年」をカトリックが受け継いだもので、1300年にボニファチウス8世教皇によって制定されました。ちなみに2000年の大聖年の時は、「最貧国の国際債務帳消し・死刑制度の廃止・拘留されている不法入国者への恩赦」という3つのアピールが出されました。これから聖年についてのフランシスコ教皇のさまざまなメッセージが出されることと思いますが、何よりもわたしたちが「神に立ち返る時」になれば、と思います。

## 七五三の祝福

11月17日(日)11時30分のミサの中で、主任司祭・鈴木真師による「七五三の祝福」が執り行われました。

参加者は6人で、聖堂内の多くの信徒たちから温かい拍手が送られました。子どもたちは司祭からメダイを首にかけていただき、千歳飴が入った袋を手渡され、とてもうれしそうでした。中には、儀式中に母親に甘えて抱きつく子どももいて、ほほえましかったです。共同祈願では、七五三の祝福を受ける子どもたちのために「地球温暖化をはじめ、多くの困難もある中で、未来に向かって育っていく子どもたちが、神さまと両親や周囲の人々に大切に守られ、健やかに成長できますように」と唱えました。神さまから子どもたちの上に、たくさんのお恵みが注がれますように！